

チューリーリヒ歌劇場

話題も公演も豪華陣の 初日本公演が続く 登場が続く

文*中 東生
Text by Shunzaburo Naka

フランスもの3本を含む14の
プレミエが並ぶ新シーズン

3年に一度の「チューリーリヒ祭り」のハイライト、チューリーリヒ湖から2日連続で打ち上げられる豪華な花火も、オペラの終演を待って始まるほどの待遇を受けているチューリーリヒ歌劇場。祭り終了と共に短い夏休みに入り、来シーズンのプログラムが届いた。第一印象としては多少地味だが、友人好みの淡い構成だ。全体的にはフランスオペラに力を入れる1年となるようだ。新演出にフランス・オペラが3つも並んでいるのである。その代わり、常連だったモーツァル

トの新演出は1作もなく、ワーグナーなどは、再演すら1作もないのは驚きだ。

当劇場が95年に市立から州立となつて以来、チューリーリヒ近郊の小都市ヴィンタートゥアーで、まず小規模なオペラからシーズンを始め、その後、後に当劇場で本格的なオーブニング公演をするという形が定着している。今年はいジエツロの《セビリヤの理髪師》が前者に選ばれている。昨年、モーツァルトではなく、ヨハン・クリステイアン・バッハの《ルチオ・シツラ》が選ばれ、高い評価を得たので、ロッシニの《セビリヤの理髪師》の登場のおかげで埋もれてしまったというこの作品を楽しめそうだ。10月には、DVD化されたNHKテレビでも放映された、ネット・サンティ指揮のロッシニ2版も再演開始されるので、比較できるのも面白い。

そして真打ちのオーブニングは、ジョルターニの《アンドレア・シエニエ》。この号が出る頃には、もう終わってしまったのが残念だが、劇場側も力を入れているらしい。マッダレーナにダニエラ・デツシーを起用したかったが、スケジュールが



ホセ・クーラ



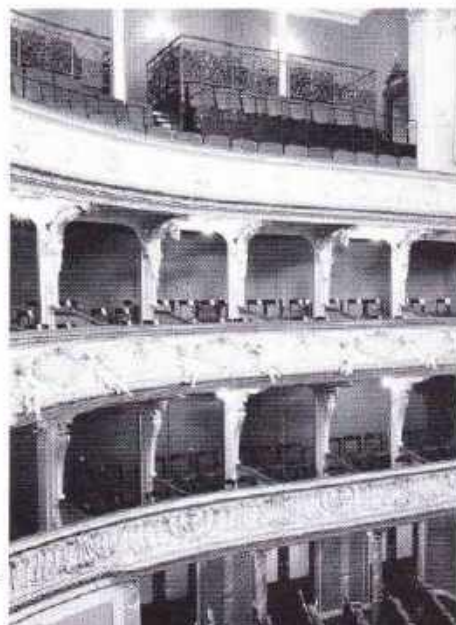
《イル・トロヴァトーレ》
に出演 レオ・ヌッチ

どうしても合わなかったという噂があるが、実現していれば、シエニエはきっと、バートナーのファビオ・アルミリアートになっていたはずで、それよりもサルヴァトーレ・リチートラのシエニエを聴ける方が、個人的には興味をそそられる。指揮はサントイなので、きっと興奮度の高い幕開けになっていることだろう。

チューリーリヒ歌劇場の凄いとところは、1年間の新演出の数だ。1か月に1作以上の新演出を世に送り出しているのである。それに伴う練習、舞台稽古から最終リハーサルまでを合わせる、劇場内は常にフル回転していることだろう。来シーズンも4の新演出タイトルが並んでいる。

著名歌手が次々に登場

その中で、知名度の高いキャストが勢揃いするのはヴェルディの《イル・トロヴァトーレ》だ。クリステイナ・ガラルド・トマス・レオノーラ、マルセロ・アルヴァレスのマ



©Suzanne Schwieritz

ンリーコでは、正統派のヴェルディ歌唱は聴けないだろうが、それでも楽しませてくれるに違いない。アズチーナはルチアーナ・ディンティノで、前シーズンのアムネリスよりも、現在の彼女の声さばきには合っているだろうし、ルーナ伯爵のレオ・ヌッチが、失われつつあるヴェルディの伝統をしっかりと支えてくれるだろう。あとはアダム・フィッシヤイが、どれだけ歌手陣をまとめて、ヴェルディの色に染められるかに期待したい。そのディンティノが初めて挑戦するロシア・オペラ、《ボリス・ゴドゥノフ》では、マッテイ・サルミネンの歌う題名役も聴く価値は十分にあるだろう。

前シーズンの《トゥーランドット》で再評価されているホセ・クーラが、来シーズンではマスネの《ル・シツド》で登場するのは意外だ。トゥールーズ・オペラとの共作で、チューリーリヒ歌劇場で舞台にかけられるのは初めてのこのオペラ、ブラッソン指揮とくれば興味をそそられる。



チェリーア・バルトリ



ヴェニセリーナ・カサロヴァ

常連のバルトリ 新発掘オペラに出演

そして、このところ毎シーズン新演出に登場しているチェリーア・バルトリは、アレヴィの《クラリ》に出演する。パリでの初演からちょうど180年後の来年、スイスでの初演となる。実は彼女の新しいCDは伝説のプリマ、マリブランに捧げられるもので、その中に《クラリ》のアリアも収録されている。このオペラはアレヴィが彼女のために作曲したものなのだ。彼女の生誕200年を記念してこのオペラをやる、とバルトリが劇場支配人を口説き落としたり、マリブラン亡き後、すっかり埋もれてしまっていたようで、歌手陣に渡す譜面も劇場側が印刷している最中だという。他の出演者もこのオペラを知らず、一度譜面だけでも見たい、と希望が殺到したからさうだ。バルトリがベルカント再現・復活の夢をかけたこのオペラは必見だろう。

これも珍しいオペラではあるが、ウィーンでニール・シコフが大成功をおさめたそうで、彼の当たり役と言えるらしい。当劇場の舞台にかけられるのも80年以上ぶりということだ。

カサロヴァ、カルメン・デビュー

シーズン最後の新演出を飾るのはビゼーの《カルメン》で、ヴェッセリーナ・カサロヴァが題名役デビューする。前プロダクションである01/02年の《カルメン》新演出は評判が芳しくないもので、チュエリヒの聴衆は今でも、バルツァとカレラスのロングラン《カルメン》を懐かしそうに語る。今回カサロヴァがその歴史を塗り替えられるのか、興味深いところだ。ドン・ホセはヨナス・カウフマンで、ホセ役には姿も歌も端正過ぎる気がするが、どういったアプローチを見せるだろうか。ミカエラはイザベル・レイは、最近脱スープレットを目指しているようだが、全体的に軽めの《カルメン》にはなるだろう。音楽監督のウエルサーメストが、どうドラマティックに仕上げるのであろうか。多少不安もあるが、チュエリヒのオペラファンには待ち遠しい、ラスト演目になるであろう。

この他にも、アーノンクールがユリアーナ・パンゼを起用し、チュエ

Opernhaus Zürich

リヒ歌劇場初となるシニューマンの《ケノヴェーヴァ》、前シーズンに続き、ラシュトンがチュエリヒ歌劇場のために作曲した《桑の木陰》なども魅力的ではある。それら14の新演出プロダクションの他に、再演も相変わらず盛りだくさんだ。

独断と偏見で勧めるとすれば、来シーズンは降りてしまおうが、アーノンクールがブレミエを振った《偽の女庭師》、サンティのロングラン《オペラ《トスカ》》(最後のシーンの演出は腹立たしいが)、ウエルサーメストの《フィガロの結婚》あたりが楽しめる。個人的には、見そびれてしまっている《ドン・カルロ》をダニエラ・テッシーの日に観たい。一観客の感想を吐露してしまつたついでにもう一つ言うならば、当劇場の現在のレパートリーの中で一番古い《ランメルモールのルチア》が、今シーズンも続けて再演されるのを見ると、初演を歌ったグルペローヴァの喪失が残念でたまらない。別演目の公演中に、舞台の上で衣装に引火して大火傷を負った、スイス人メ



今シーズン再演される《偽の女庭師》
©Suzanne Schwietz



《ドン・カルロ》
©Suzanne Schwietz

- 所在地: Falkenstrasse 1, CH-8008 Zurich
- 座席数: 約1100席
- シーズン期間: 9月から7月中旬
- ◆総裁: アレキサンダー・ペレイラ
- ◆音楽監督: フランツ・ウエルサーメスト

【歴史】1834年、チュエリヒ初の不動産式劇場として創立。ワーグナーがチュエリヒ亡命期間中の活動場所でもあった。91年、その劇場が焼失した後、現在の所在地に今の劇場が創立される。1926年、演劇専門の劇場が建てられたため、現在のような、オペラ・オペレッタ・バレエ劇場となる。
http://www.opernhaus.ch/

ゾ・ソプラノに対する、劇場側の保証態度に立腹したから、などともっともらしい噂が流れているが、《マリ・ア・ストゥアルダ》の初日をキャンセルして以来、戻って来なくなつてしまった真相は劇場支配人だけが知っている、と言われる。

01年には「最優秀歌劇場専属オペラケストラ」に選ばれたオケ、給料も高いが拘束時間も長く、広いレパートリーを誇る本格的合唱団、プロ意識の高い児童合唱団、市民に根付くエキストラ協会が公演のレベル保持に貢献している。そして、州立歌劇場としてチュエリヒ州全体に支えられるこの劇場は、今年も目が離せない。



©GTG/Mario del Curto

Switzerland
スイス
ジュネーヴ歌劇場
スイスの他の劇場と一線を画す。
新展開に期待

文*中 東生
Text by Shiuobu Naka



《トロイ人》デイドンを演じたオッター
photo: GTG/Magali Dougéros

●所在地: Place Neuve
(11 Bd du Théâtre) CH-1211 Genève
○座席数: 1488席
○シーズン期間: 8月21日から6月28日
◆劇場総監督:
ジャン・マリー ブロンシヤール
【歴史】1876年創立。火事に遭い、
1962年に再建。
<http://www.geneveopera.ch/>

Grand Théâtre de Genève

劇場自体が美しいことで有名なジュネーヴ歌劇場は、レパートリー制ではなく、スタジヨーネ制(1演目を一定期間上演するシステム)をとっているため、公演回数がさほど多くないのが残念だ。キャスティングも経営も「我が道を行く」傾向にあり、スイスの他の劇場とは一線を画す。その一因は、二期制の年間チケットにあると言われている。普通にチケットを手に入れるのは比較的難しいのに、実際に劇場に行ってみると、空席が目立ちたりすることが多い。スイスのフランス語圏に位置するため、フランス系の人選も多いが、来シーズンの注目点はドイツ・オペラが重視されていることだ。シーズン・オーブニングこそベルリオーズの《トロイ人》だが、アンネ・ゾフィー・フォン・オッターのデイドンは今すぐにも聴いてみたいし、12月の《魔笛》、5月の《ローエン格林》とドイツものが続くのである。前者は完全ダブルキャスト制で、聴き比べるのが楽しいし、後者はチュリーと歌劇場でもローエン格林を歌い、好

評を博したクリストファー・ヴェントリスだから、はずれないだろうと思われる。ヘンデルの《アリオダンテ》で題名役を歌うジョイス・デイ・ドナートは、最近重い役も歌うようになってきているが、ここでは真の彼女の声が生きているであろう。そして、個人的にはラストの演目《ドン・カルロ》に興味を惹かれる。ニコラ・ルイゾッティの指揮で、伝統に忠実な上演が期待できる。クリステイナ・ガラルド・ドマスはどんなエリザベッタを聞かせてくれるのだろうか。オーケストラはスイス・ロマンダ管が主体で(小編成のオペラには、ジュネーヴ・チェンバーオーケストラが演奏する)、オペラハウス、ラジオ、コンサートと3役をこなす。創設時は高いレベルで名を馳せた。首席指揮者にはサヴァリッシュも名を連ね、今でもその名演は語られるほどだ。このところ、経営難、オケのレベルの低下など、芳しくない噂ばかりが聞かれるが、巻き返しを望みたい。

ローザンヌ・オペラ Opéra de Lausanne

News

2008年10月《カルメン》公演で初来日

スイス、レマン湖北岸にあるローザンヌは、バレエ・ファンには、新人コンクールやベジャールの本拠地として有名な都市。この町のオペラ座が、初来日公演を行う。

ローザンヌのオペラ座は1871年落成し、オペレッタを数多く上演してきた。1970年代以後、ローザンヌ市が国際音楽祭の運営に乗り出し、84年に、オペラ、バレエ、コンサートのための市民劇場財団が設立。国際音楽祭も、毎年9か月間、定期的上演を行う劇場と生まれ変わり、ローザンヌ・オペラとしての歩みが本格的に始まった。

今回の演目は《カルメン》。トゥールーズ・キャピトル歌劇場のアルノー・ベルナルが演出を担当し、ヘルシンキ・オペラとの共同制作で、2007年秋に初演されるプロダクションだ。カルメン役は、ヨーロッパの主要歌劇場で高く評価されるユリア・ゲルセワとマリーナ・ドマシエンコ。美貌と歌唱力に定評のある2人に期待が寄せられている。



ローザンヌのオペラ座



ユリア・ゲルセワ



マリーナ・ドマシエンコ

★ローザンヌ・オペラ日本公演 2008年10月
◎招請: コンツェルトハウス・ジャパン03-3538-6188